

## 医療の現場から ～治療トピックス～

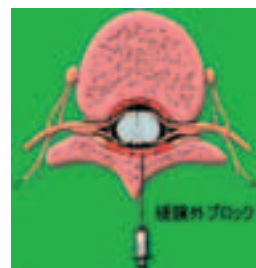
### 手術後の除痛 ～特に硬膜外鎮痛について～

麻酔科部長 増谷 正人



手術を受けるにあたって、術後の痛みは心配なものの一つだと思います。昔は手術後には痛いものだとして軽視されがちでしたが、最近では手術後の痛みが体に及ぼす影響も調べられ、術後痛を取り除くことの重要性も徐々に認識されるようになってきました。それに伴い術後鎮痛法についても研究が盛んに行われるようになり、いろいろな鎮痛方法が開発されてきています。

そのなかでも腹部手術や下肢手術の鎮痛手段としては、硬膜外ブロックという有用な鎮痛方法があります。これは昭和天皇の手術の際にも行われた鎮痛法で、硬膜外麻酔を行った後、細いチューブを残しておき、このチューブを通して痛み止めを持続的に投与するという方法です。投与される痛み止めは局所麻酔薬と麻薬系鎮痛薬が一般的です。当院でもこれに準じて特に下肢の人工関節手術などに対しては、低濃度の局所麻酔薬を主体とした持続硬膜外ブロックによる術後鎮痛を行っています。



しかし、薬というのは全てそうなのですが、投与に伴って副作用的な効果が出現してくることがあります。硬膜外鎮痛においても同様で、局所麻酔薬については高濃度のものを使えば鎮痛効果は十分となるわけですが、痛覚神経と同時に知覚神経や運動神経もブロックされてシビレ感が強くでたり、足が動かさないなどの訴えが多くなります。実際には手術時の使用濃度の1/3～1/4程度の低濃度を手術後には使用していますが、それでも足指の運動不全が出現したりして中止を余儀なくされることもあります。いずれにしても局所麻酔薬によるシビレ感や運動不全症状は薬の注入を中止することで改善しますので心配は要りません。



バルーン式鎮痛薬  
注入ポンプ

麻薬系鎮痛薬は、硬膜外投与だけでなく、一般的に筋肉注射や静脈注射としても使用されています。この薬は強い鎮痛作用を持っていますので、単独の使用でも術後の痛みをとることが可能ですが、その副作用として吐き気や嘔吐、大量に使うと鎮静作用（呼吸抑制）などが出現することがあります。特に早くから食事などを摂ることができる整形外科の手術後には、吐き気は術後鎮痛の上で問題となる症状です。手術後には腸管の運動が弱くなるなどのいろいろな要因が絡んで吐き気が出現しますので、一概に術後の吐き気は麻薬系鎮痛薬のせいだけで起こっているわけではありませんが、麻薬系鎮痛薬がその一因であることは間違いありません。この薬による吐き気は、個人個人の感受性の差があるといわれています。たくさん使っても全然吐き気を起こさない人もいれば、

ほんの少量使っただけでも長時間ひどい吐き気が続く人もいます。そしてこの感受性の差については投与前に調べることができず、使用して初めてわかることが多いのです。吐き気が出た場合には、単純には吐き気止めを使用すればいいわけですが、なかなか有効でない場合も多く頭を痛めているところでは、

その他に術後使用できる鎮痛薬として、坐薬や飲み薬の痛み止め（消炎鎮痛薬）があります。この薬は鎮痛作用としてはちょっと弱いのですが、直接的な吐き気という副作用などが少ないという利点があります。

当院でも術後鎮痛については力を入れて行っていますが、残念ながら現在のところ全ての人に適用できる完璧な鎮痛法というのは存在しません。そのため実際的な術後鎮痛の仕方としては硬膜外ブロックや麻薬系鎮痛薬、消炎鎮痛薬などの鎮痛手段の良いところ悪いところを考慮した上で、個々の患者さんの状態に応じて調整して対応させていただきます。

術後に吐き気や嘔吐のおこりやすい人  
女性 乗り物酔い 非喫煙者  
術後吐き気・嘔吐の既往  
＜麻薬系鎮痛薬への感受性の差＞